東高通信

令和５年度　７・８月号

日	曜	学　校　行　事　等	生徒会・部活動関係
７月			
18	火		
19	水	終業式　表彰伝達式	
20	木	夏期課外①(1･2年国数英、3年理社)	野球選手権大会③
21	金	夏期課外②	
22	土	教員採用試験準備(午後)	テニスミドルクラス強化合宿(～23、南相馬) 野球選手権大会④(～23)
23	日	教員採用試験（体育）	
24	月	夏期課外③	
25	火	夏期課外④、推薦委員会②	
26	水	夏期課外⑤、東高見学会①	
27	木	３年課外Ⅰ(理社)、東高見学会②	
28	金	３年課外Ⅱ	
29	土		
30	日		
31	月	３年課外Ⅲ	ダンス部発表会(～8/1)
８月			
1	火	３年夏期課外Ⅳ(国数英)	書道全国総文祭(～3日、鹿児島) テニス県北ジュニアシングルス選手権(～2日) 写真部撮影技術講習会(13：00～、本校)
2	水	３年夏期課外Ⅴ	山岳全国高校総体(～12日、北海道)
3	木	３年夏期課外Ⅵ	テニス県南サマーフェスティバル(～4日)
4	金	３年夏期課外Ⅶ	
5	土		
6	日		

日	曜	学　校　行　事　等	生徒会・部活動関係
7	月	３年夏期課外Ⅷ	
8	火		県高校書道席書大会(～9日)
9	水		写真部校外撮影会
10	木		合唱部定期演奏会(13:30～、みんなの文化センター)
11	金	山の日	
12	土		
13	日		
14	月	学校閉庁日①	
15	火	学校閉庁日②、定期停電検査(午前)	
16	水	学校閉庁日③	
17	木		
18	金		県刻字協会展(～20日)
19	土		
20	日		
21	月	夏期学習会①(1･2年)	
22	火	夏期学習会②(1･2年) 校務運営委員会⑦	全日本卓球地区予選
23	水	始業式、表彰伝達式 職員会議⑦、臨時推薦委員会	
24	木		
25	金		
26	土		陸上新人地区大会(～28日) 野球秋季支部大会①(～27日)
27	日		
28	月	学習時間調査(～3日) 教育実習(3、4週間)開始	
29	火		
30	水	SC	
31	木	東桜祭(校内)	

▼

変人のすすめ

３年４組担任　川﨑　かおり

私が大学4年生の頃、大事件が起きた。なんと、350年間未解決であった「フェルマーの最終定理」が、プリンストン大学の数学者ワイルズ博士によって証明されたのである。当時、私が所属していた研究室の教授の話では、ワイルズ博士の証明が完成したことが全世界の大学にFAXされ、各大学がこの快挙に沸いていたらしい。この歴史の一大事が起きた時代に、自分が理学部数学科の学生であったことが誇らしかったし、学問の素晴らしさを身近に感じることができた。

漫画で取り上げられていて知っている人も多いようだが、フェルマーの最終定理は「3 以上の自然数 n について、$x^n + y^n = z^n$ となる 0 でない自然数の組 (x, y, z) は存在しない」というものである。この定理をつくったのはフェルマーであるが、フェルマー自身は「この定理に関して、私は真に驚くべき証明を見つけたが、この余白はそれを書くには狭すぎる。」との書込みだけしか残さず、その定理の真偽を後世の数学者に委ねることになったのだ。見た目が魅力的な定理だけに、この証明に研究時間のほとんどを費やして、数学者人生を棒に振った人も多くいるらしい。

私が学んでいた大学では、フェルマー予想の解決を祝い、ちょっとしたセレモニーがあった。当時、東京工業大学の数学者、加藤和也教授をお招きして、２日間にわたってこの定理の証明について、講義していただくものだ。加藤先生の講義は、学部生の私には難解で最初の2時間くらいしか理解できなかったが、加藤先生がとても素敵な人ですっかり心を奪われてしまい、２日間とも集中して講義をうけることができた。さて、先述した加藤先生だが、30代で東大教授になられた、整数論分野では世界的に知られている偉才の持ち主である一方、実は奇行で有名なのだ。大学院生時代には、数学に没頭するあまり、洋服を着るのを忘れて全裸に近い状態で外出してしまい警察に通報されるなど、数え上げたらキリがない。

私は、「一流＝変人」だと思っている。加藤先生のファンになったのも、変人ぶりに感激したからだ。東高生の皆に言いたいことは、成功者になりたければ「変人になれ」ということだ。少なくとも、我を忘れて変人のごとく没頭すれば、必ず数学はできるようになる。皆は、打ち込み方がまだまだ足りないような気がする。しかし、なってはいけない変人もいる。フェルマー予想の証明を完成させたのはワイルズ博士だが、一歩手前まで追い込んだのは、日本人の若き数学者「志村五郎、谷山豊」である。前途洋々のはずの天才谷山豊は、輝かしい将来があるにもかかわらず、突然自殺してしまった。恐らく、研究に没頭するあまり神経衰弱に陥っていたのだろう。人間、身体が疲れてくると心の頑張りが効かなくなり落ち込みやすくなる。疲れたときには、寝るのが一番。変人にも休息が必要だ。

【書とwell being】　　郡司　仁美

先日、とある方から東高書道部に揮毫依頼がありました。部員たちにとってとても嬉しい、そしてありがたいお話でした。「奥州街道御宿場印」の筆耕です。「御宿場印」と聞いてもイメージわかないですよね…完成したらご披露しますのでその時見てくださいね。10月にプレスリリース、販売予定です。

そのご依頼の打ち合わせの時に、担当の方から「東高書道部の魅力はなんですか？」と尋ねられました。改めて考え、東高書道部の魅力は「チームの力」ですとお答えしました。東高書道部員たちは、半数以上が高校生になってから書道を始めた生徒です。ですが、毎日書道室に集まり、部員相互に練習や合評を重ね、実力をつけています。そんな努力を認めていただけたことは大変ありがたいことでしたが、それだけではありません。ご依頼してくださった企業には東高の卒業生が就職しており、大変しっかり働いてくれているとのことでした。こういう生徒を育てている東高ならと、揮毫依頼を決めてくださったとか。そういった一つひとつのご縁で人は繋がっているんだなと改めて感じた出来事でした。

その時に、質問がもう一つ。「書道の魅力って何ですか？正直どの作品が良いかとかわからなくて（笑）」と。ということで、以下回答した内容を記します。

書作品を見る側のことから言えば、白と黒のモノトーンの造形美、書かれている言葉のメッセージ性、線に込められた筆者の思いを受け取れる楽しさや感動…

書く側から考えてみれば、自分自身の表現としてのツール、文字の上達、書き重ねていくごとの自分で気づける作品の変化、目指すものを書き上げることができた時の達成感…

などなど。

今記したことはほんの一部…書には計り知れないさまざまな魅力がありますが、最も伝えたい書の魅力は、試行錯誤できる変化と楽しみ、またそれによって生まれる品格ある線の美しさです。

そして、よりイメージに近い作品にするために、文字の大きさに変化をつけてみたり、紙面構成を変えてみたり、墨色を変えてみたり、変えてみた結果、やっぱり前の方がよかったってことになってみたり…その一つひとつの経験が、高校生にとってはこれからの社会を生きていく上で必要な力を身につけていく方法になっているとわたしは考えています。だから高校で芸術の授業をする、部活動をする。

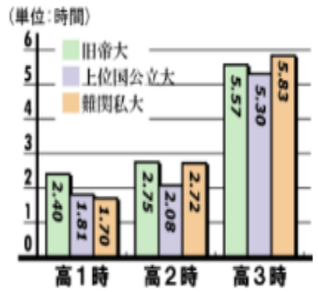
勿論、書作品自体も上達してほしいです。でもでも、もっと大切なことは、書作品制作の経験を通して、これから社会の中で生きていくために、より良い方法を見つけようと何度もチャレンジすることを知ってほしいということ。その試行錯誤の繰り返しの中で、諦めない心を知ってほしい。考え続けることを知ってほしい。感性を豊かにしてほしい。そして、その結果、書道大好き！って思ってもらえたら嬉しいかな。

書く側でも見る側でも…書が東高生の皆さんのこれからの生活を豊かにしますように。

１学年担任　木村翔太郎

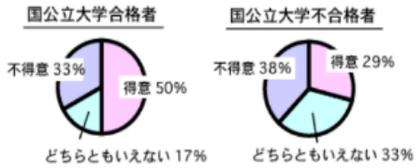
1年生の皆さんは高校に入学してもうすぐ半年ですね、満足のいく学校生活を送ることができていますか。

さて、右のグラフは現役大学合格者（2000人）の平均学習時間を表したもの（某予備校調べ）です。国公立大学合格者は、早くから勉強を始めていて、高１で約２時間、高２で約2.5時間、高３で約5.5時間勉強しています。５教科を満遍なく学習するには、一朝一夕の詰め込みでは無理があるということがわかります。

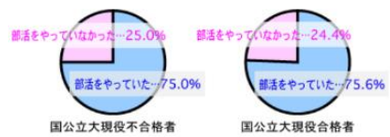


また、国公立大学合格者の約５割が得意科目に英語を挙げています。不得意と答えたのは３割。文理を問わず、合否を分ける鍵を握るのは「英語」。「英語」を攻略できるかどうかにかかっていることがわかります。

次に、国公立大学合格者はどれくらい部活をやっていたのか？右のデータを見ると、現役合格者も不合格者もそれぞれ約75%が部活動をしていたことがわかります。ここから、部活動は合否に関係ないということがわかります。



資料8 英語は得意ですか?



資料14 合格者と不合格者における部活動を行っていた者の割合

まとめ

・高１で2時間、高２で2.5時間、高３で5.5時間の学習時間が必要
・英語を得意科目にしよう
・部活は合否には関係がない